国史跡大山寺旧境内の石垣を復旧中！

大山町教育委員会では、大山寺旧境内西楽院等石垣復旧工事を行っています。

西楽院は明治8年まで大山寺の本坊だったことから、立派な切石積の石垣が多く見られます。石垣復旧では、度重なる災害などにより傷んだ石垣を、調査と並行して解体と積み直しを行っています。一部に地盤沈下や石材の欠損があり、完全に元通りとはいきませんが、文化財として本来の石垣の姿を復元し、その記録も残していきます。

この復旧工事は11月末までの予定です。工事の様子は見学できますので、ぜひ足をお運びください。

（社会教育課　文化財室）

▲石垣解体の様子

まちのたから（44）～文化財室通信～

シリーズ「日本遺産」外伝 二

今回から、日本遺産のストーリーを価値付けしている構成文化財や指定等文化財との関わりについて紹介します。

御輿行幸（みこしぎょうこう）（御幸（みゆき））

平安時代中期の天慶2（939）年、平将門が謀反を起こしたとき、大山寺は朝廷の祈願所だったことから、勅使の命を受け、将門平定の祈願法要を行うために各々の堂社の本尊を御輿に乗せ、一か所に集めて法要を行ったことが御幸の始まりだと伝わります。その後、毎年4月24日の大山さんの春祭りの日に行われてきました。

江戸時代には、祭りの様相は派手になり、御輿の数も七社まで増え、領内村々に対して前年から役割を振り当てられました。『大山寺縁起』にも登場する八大竜王の幟を先頭に、面、獅子、拍子方、下山明神、霊像権現の幟に先払い、鉄砲組、奉行と300人もの人々に守られたものでした。行列の中心は大山寺の本尊である大智明権現の御輿で、最も厳重に守られました。この祭りを安全に行うため、幕府は鳥取藩に命じて50人の士卒を警固にあたらせました。その様子は、鳥取県立博物館所蔵の『大山寺博労市図』にも描かれています。江戸時代中期以降、春祭りの日には博労座で牛馬市も行われていましたので、それは大変なにぎわいだったことでしょう。

廃仏毀釈後、元の大山寺領内の人々の信仰に支えられ、御輿の数は減りながらも続けられましたが、道具の焼失などで一度途絶えました。

その後、二基の御輿の修復を経て、昭和62年に御幸は復活し、現在は3年に1度行われています。

特別な「御輿行列」

今年の5月20日、大山開山1300年の幕開けとして、大山寺では開創法要が執り行われ、御輿行列が参道を練り歩きました。

この行列は、女性も担ぎ手となったこと、大山寺との因縁がある三徳山三佛寺の御輿が担がれたことが画期的で、この特別な日に御輿行列が彩りを添えました。

大神山神社奥宮八角御輿

大神山神社奥宮社殿の中には、御輿行幸の花形である御輿が保管されています。

八角造りの大型御輿で、神輿高3・18m、担ぎ棒を含めた全長は5・57mを測ります。寛政8（1796）年の火災で焼失したため、伯耆国日野郡黒坂村の人々によって文化11（1814）年に寄進されたものです。担ぎ棒には、そのことを示す銘が残ります。

平成14年度の国民文化祭に合わせて、この御輿は保存修理をされました。町内にある御輿では最大で、御幸の中心的存在であった大智明権現の御輿であることから、平成15年12月2日に大山町指定文化財となりました。

（社会教育課文化財室）

▲大神山神社奥宮の八角神輿